

<研究ノート>

関西方言の自称詞・対称詞に関する覚え書き

村中淑子

桃山学院大学

tmuranaka@andrew.ac.jp

A Note on Terms for Self and Address Terms in the Kansai Dialect

MURANAKA Toshiko

St. Andrew's University

Key Words: Personal Pronoun, "Uchi", First Name, Identification, Individuality

1 はじめに

自称詞とは「話し手が自分自身に言及することばのすべてを総括する概念」であり、対称詞とは「話しの相手に言及することばの総称」である（鈴木 1973）。自称詞・対称詞が多様であるのは日本語の特徴といえようが、関西方言においても例外ではない。

本稿では、関西方言¹の自称詞および対称詞について、人称代名詞を主な対象として概観した後、自称詞「ウチ」と、自称詞として「下の名前」を用いる現象に注目し、考察する。

2 関西方言における自称詞について

まず、関西で使われている可能性のある自称詞（人称代名詞）を網羅的に挙げてみると、ワタクシ・ワタシ・ワタイ・アタシ・アタイ・アッシ・ワテ・アテ・ワシ・ワイ・オレ・ボク・ウチ・ジブン等がある²。使用者の性差と使用場面の改まりの差によって大まかに分類してみると、表1のようになる。関東と共通の語形を明朝体、関西方言と思われる語形をゴチックで示した。現在あまり多く使われていないと思われる語形は〈 〉に入れた³。

表1 関西における自称詞（人称代名詞）

	公的場面	私的場面
男女共用	ワタクシ ワタシ ジブン 〈ワタイ〉 〈ワテ〉 ⁴	〈ワタイ〉 〈ワテ〉
女性語的	アタシ	ワタシ アタシ アッシ ウチ 〈アタイ〉 〈アテ〉
男性語的	ボク	ボク オレ ジブン ワシ ワイ

(1) 関東との共通点と相違点

表1では、関東と共通の語形とおもわれるものを明朝体で示した。ワタクシ・ワタシ・ジブン・アタシ・ボク・オレであるが、関西でもこれらはよく使われている。

関西において、関東と共通する語形の多くは、公的場面と私的場面の両方にわたる。しかし、関西方言特有の自称詞の使用は、現在では、私的場面にほぼ限定されるのではないかと思われる（数十年前までは、おそらく、ワタイ・ワテ等が公的場面でも使われており、方言語形が公的場面と私的場面の両方にわたっていたと思われる）。

ここで挙げた人称代名詞は、関西方言話者全員がすべてを使っているというものではなく、話者がこれらの中のいくつかを自分のレパートリーとして、場面に応じた使い分けを行なっているものである。たとえば、あるひとりの関西の女性は、ワタシとアタシを使い分けるが、ワタクシやウチは使わない、ということがあり得る。

参考になる資料として、国立国語研究所『大都市の言語生活』（1981）がある。これは約40年前に東京と大阪で実施された調査の結果がまとめられたものである。東京は1974年に639名、大阪は1975年に359名を調査しているが⁵、一人称代名詞について、10%以上の使用率がみられたものとしては、ワタクシ・ボク・オレ・ジブンが東京と大阪で共通しており、大阪ではワシとウチに特色があること、9%以下の使用率で大阪特有のものにはワイ・ワタイがあることを記している。

(2) 男女差について

男女の言葉の差が比較的小さい関西方言において、男女差が明瞭に現れる項目の一つが自称詞である。表1に「女性語的」「男性語的」として挙げた。日本語における男女差は縮まりつつあると言われるが、自称詞に関しては、男女差が縮まる気配はあまりない。特に、くだけた場面においては、男女の使う自称詞は明瞭に分かれていると言えそうである。

この男女差については、語形そのものに性差のあるものと、語形そのものではなく運用に性差のあるものがある。語形そのものに性差があるのは、アタシ・アッシ（アタシの音声変化形）・ウチと、ボク・オレ・ワシ・ワイである⁶。運用に性差があると思われるのは、ワタシとジブンである。ワタシは、男性は公的場面でのみ使い、私的なくだけた場面

で使うことはほとんど無いと思われるが、女性は私的な場面でも使う話者が珍しくはない。ジブンは、さほど多くの女性が常用しているふうではないが、女性が使うとすれば公的なニュアンスを持つかと思われる。いっぽう、男性の場合は、ジブンを自称詞として、公的な場面で使うのみならず、家族や友達に向けての通常の発話においても使う話者がいる。

(3) 「ラ」の意味・用法

表には示していないが、自称詞の人称代名詞に、ラが後接する場合がある。関西方言におけるラには、2つの特徴があるように思われる。

1つは、共通語においてと同様、複数を表すラだが、ワタシにラのついた「ワタシラ」を公的な場でも用いることが、関西方言の特徴としてあげられるのではないかと考える。

もう1つは、必ずしも明確に複数を表さないラがよく使われる、ということである。たとえば「ワタシラそんなん知りません」や「オレラそんなとこ行かへんわ」などと言えば、「私を含めた大勢の人々もおそらく、そんなことを知らない」「そんなところへ行かない人間は自分以外にもたくさんいるだろう」といった意味も含意されうるが、基本的には「自分ひとりがそれを知らない」「自分ひとりがその場所へ行かない」の意味で使用可能である。

3 関西方言における対称詞について

関西で使われている可能性のある対称詞（人称代名詞）を網羅的に挙げると、アナタ・アンタ・アンタハン・アンサン、オマエ・オマハン、オノレ、ワレ、オウチ、オタク・オタクサン、ジブン、キミ等がある⁷。使用者の性差と使用場面の差によって大まかに分類すると表2のようになる⁸。表1と同様、関東と共通の語形を明朝体、関西方言と思われる語形をゴシックで示した。現在あまり多く使われていないと思われる語形は〈 〉に入れた。

表2 関西における対称詞（人称代名詞）

	公的場面	私的場面	
		初対面あるいは顔見知り程度	親しい対等もしくは目下
男女共用	〈アナタ〉	オタク オタクサン	アンタ ジブン キミ 〈オマハン〉
女性語的		オウチ	
男性語的			オマエ オノレ ⁹ ワレ

(1) 関西における対称詞全般について

表2には人称代名詞をあげたが、関東と同様、対称詞として実際によく使われているのは、人称代名詞ではない。固有名（名字や下の名前、およびその変形やそれらに敬称サン・チャン・クン・ヤン等をつけたもの）、役職名、固有名と役職名の組み合わせ、などが対称

詞としてよく使われる。親族に対しては親族名称もよく使われる。親族以外の相手に親族名称で呼びかける虚構的用法(鈴木 1973)も行われるし、男児に向けてボクやオニイチャン、女兒に向けてワタシやオネエチャンと呼ぶこともよくある。

関西方言としては、対称詞としての人称代名詞の使用は、公的場面においては使用が避けられる傾向が強いが、もし使われるとすればアナタくらいであろう。私的場面でも、ごく親しい相手以外には、人称代名詞の使用は避ける傾向があると思われるが、固有名がわからない等の理由で人称代名詞を使わざるを得ないような場合、顔見知り程度の大人同士で比較的好く聞かれるのは、オタク・オタクサン・オウチである。親しい相手や目下に向けては、アンタ・ジブン・キミ等が使われる。ごく親しい相手に対しては、女性はアンタ、男性はオマエを使うことが多いようである¹⁰。

(2) アナタについて

現在の関西では、アナタという対称詞は、あまり地元のことばと意識はされていないとおもわれるが、昔はふつうに使われていたようだ。前田(1949)によれば、明治以前は、親愛語がオマエ、尊敬語がアナタ、敬愛語がオマエサン・オマエサマ(これの名残が老人が目下に使うオマハン)であり、アンタは遊郭の言葉であったが、その後、アンタが一般に広く用いられるようになったという。

アナタが使われる場合、共通語的に話せばアナタとなるが、中高年層が方言的に話せば、奥村(1962)にもあるとおり、アナタとなるであろう¹¹。

(3) ジブンについて

「ジブン」が自称詞としても対称詞としても存在するのは、関西方言の特徴であるといえよう。しかも、同一人が両方を用いる場合がある。ジブンと言った場合、自称詞なのか対称詞なのかは、状況から判別できるので、混乱することはないようである。

4 関西方言における自称詞ウチについて

本章では、自称詞ウチについて取り上げる。榎垣(1946)は、自称詞ウチについて、次のように述べている¹²。

この語は江戸期の文献には見当たらず、ずっと後に生まれたものと思われるが、現在では婦人用語として非常な勢力を持っていて、京阪神は言うまでもなく、近畿全般での婦人常用語となってきた。中年以上の婦人はまだアテ・ワテを使っているが、若い人達の使うウチに追々と圧倒されるのではなかろうか。

奥村(1962)は、京都のことばに関する説明の中で、次のように述べている。

ワテ系統が京都市付近の年配の女性に多いのに対し、もっと一般的な女性語がウチである。これは、京都市の他、山城・丹波に、かなりよく使用されており、その勢力は、いよいよ強くなっていく状態である。

これらの記述から、20世紀の中頃に、関西において、ウチという自称詞の勢いが強まっていた様子がうかがえる。しかし、その後関西で、20世紀後半から21世紀始めにかけて、ウチが順調に増加し全面的に広がったかという点、そうではないようである。

まず、約40年前の大阪における調査結果をみよう。国立国語研究所(1981)の大阪女性の回答内訳をみると、ワタシ87.3%、ウチ26.1%、ワタクシ24.2%、アタシ14.5%、である¹³。これは調査時(1975年)の大阪在住女性話者165名の回答であるが、大阪府出身者(5~15歳の主な居住地が大阪府)に絞っても、ウチの使用者は82名中21名であり、約4分の1であることに変わりがない。大阪府以外の近畿出身者の場合は30名中3名で、10%にすぎない。むしろ、中国地方や四国地方の出身者の方が、ウチの使用率が高い。世代別に見るとばらつきがあり、一定の傾向は見られない¹⁴。

その後の、関西における調査データをいくつか、みってみる。

国立国語研究所(2002)(1989年調査)では、大阪の女子高校生の21.9%(530名中116名)が、「クラスの最も親しい同性の友人に対して」、自称詞ウチを使うと回答している(ワタシが54.5%、アタシが62.8%)。

郡(1997)では30代~70代の大阪市方言話者17名に調査した結果として、ウチは女性の自称で40代以上の中高年に使用が偏るとしている。

西川(2003)では、京都市左京区の保育園の園児の母親を対象に、「配偶者に向けて使用する自称詞」を調べているが、111名の回答の内訳は、ワタシ93名、親族名称(お母さんなど)35名、愛称・名前9名、ウチ1名、であった。

筆者は2015年7月、大阪・神戸の大学生を対象に小調査を行ったが、「ふだん友達と話すときに」ウチを使うと答えたのは女子学生16名中2名、「家族ではないかなり年上の人と話すときに」ウチを使うのは16名中1名であった(後の表4を参照)。

ここまでみると、関西の女性におけるウチの使用率は、40年前の調査以来、およそ2割程度のようなのだが、地域によっては、2割よりずっと少ない場合もある、といえそうである。そして、どの調査においても、ウチよりもワタシの使用率をはるかに高い。

ところが、西川(2011)の京都市内女子短大生170名への自称詞調査(2009・2010・2011年調査)によると、ワタシ86.5%、名前47.6%、ウチ55.3%、アタシ27.1%、愛称20.0%、ジブン16.5%であったという¹⁵。被調査者の半数以上が、ウチを使うと答えているのである。どうやら、京都市内の女子大学生において、2000年以降の数年間に、ウチが急増したらしい。

関西以外の地域でも、近年、若い女性の間で自称詞ウチの急増という現象がみられるように、荻野（2007）によれば、首都圏の女子大学生は「親友」と話す時に12%がウチを使うと回答した（2006年調査）。また小嶋（2013）によれば、愛知県内の調査の結果、2001年から2011年にかけて、「友人と話す時にウチを使用する」と答えた女子大学生の割合が、6.1%から37.9%に増加したということである。以上の結果をまとめたものが表3である。

表3 自称詞ウチの使用の変遷

20世紀半ば →→→	20世紀後半 →→→	21世紀初め
大阪・京都の若年層女性のあいだでウチの勢力が強まる。 （中高年層は従来の語形のアテ・アテ等を使用。）	大阪女性の間でウチの使用率は2割強で安定か。世代差は大きくない。 （ウチよりもワタシのほうが使用率が高い。） 大阪以外の近畿で大阪より少ないというデータあり。	全国各地で、若い女性の間で、自称詞ウチが急増（首都圏、愛知など）。 京都市内では約5割。 しかし、近畿全般に増えた訳ではない。

21世紀以降の数年間に、全国レベルで（全国一様にはなく、いくつかの地域で局地的にであろうと思われる）、自称詞ウチを使用する若年層女性が急増したようである。だが、関西だけに絞ってみると、現在、ウチという自称詞は、関西の女性全体には広がっておらず、一部の女性の使用にとどまっていると思われる。関西一円で、年代を問わず女性に広く使われている自称詞は、ワタシもしくはアタシである。

自分自身はウチを使わない関西人女性が、ウチについて、「奈良の子が使う」「京都の子が使う」などと述べることもある。しかし、実際には、大阪でも確実に聞かれる。このことが何を示すかということ、おそらく、「使用者に偏りがある」「まんべんなく広がっているのではない」ということと、「よく耳にする」「存在感をもつ形式である」ということの両方を示している、と解釈できる。要するに、関西女性の中でも、自称詞ウチは使う人と使わない人にはっきり分かれており、それは必ずしも関西内部の府県レベルの地域差によるものではないと思われるのである。

自称詞ウチは、少なくとも数十年の間、関西女性の間で、一定割合の使用が継続しているようであり、また、近年、一部では急増の傾向も見られるが、なぜ、関西女性全般へと一様に広がっていかないのだろうか。

ウチは、同じく私的場面でよく使われるアタシと比べても、私的ニュアンスがより強いように思われる¹⁶。また、これは仮説にとどまるが、ウチはアタシに比べてより強く、女性性を表すのではないかと¹⁷。私的ニュアンスの強さと女性性の強さとが、いわば「個性の強さ」という印象につながり、関西女性全員への広まりを抑制しているのだろうと考える。

5 自称詞としての「下の名前」使用について

本章では、「下の名前」を自称詞として使う現象について取り上げる。

前述の通り、筆者は2015年7月、大阪・神戸の大学生を対象に、自称詞・対照詞に関する小調査を行った。自称詞に関する結果を次の表4・表5に示す。複数回答可とした。

表4 大阪・神戸の女子大学生における自称詞（女子学生16名へのアンケート結果）

場面設定	ワタシ	アタシ	ウチ	下の名前	その他
ふだん家族と話す時	6	2	0	11	2（ねえちゃん、ジブン）
ふだん友達と話す時	10	3	2	8	1（ワシ）
家族ではない、かなり年上の人と話す時	15	1	1	1	0

表5 大阪・神戸の男子大学生における自称詞（男子学生15名へのアンケート結果）

場面設定	オレ	ボク	ジブン	ワシ	下の名前	その他
ふだん家族と話す時	8	0	3	1	4	1（ワテ）
ふだん友達と話す時	12	2	4	2	2	2（ワテ、ワイ）
家族ではない、かなり年上の人と話す時	0	14	2	0	1	1（ワタシ）

表4を見ると、女子学生の場合は、家族と話す時は16名中11名、友達と話す時は16名中8名が、すなわち家族相手でも友人相手でも半数以上が、「下の名前」を自称詞として用いている。表5の男子学生の場合も、家族相手あるいは友人相手に、「下の名前」を自称詞として用いるという回答があり、少数だが決して稀なケースではないように思われる。小規模調査ではあるが、この結果は注目すべきではないだろうか¹⁸。

他の調査の結果をみてみよう。

まず、関西地域である。

国立国語研究所(2002)(1989年調査)によれば、大阪の、女子高校生(530名)の20.0%、男子高校生(472名)の0.8%が、クラスで一番親しい同性の友人に対して「下の名前」を自称詞として用いると回答した。

廣崎(2003)の、兵庫県西播磨地域における調査によると、若年層女性14名中5名と、若年層男性12名中2名¹⁹が、「下の名前」を自称詞として用いていた。

また、前述のとおり、西川(2011)の京都市内女子短大生170名への自称詞調査(2009・2010・2011年調査)の結果では、「名前」47.6%、「愛称」20.0%であった。

以上、規模・地域や年齢が不統一ではあるが、大まかな流れとしては、自称詞としての「下の名前」使用が若年層女性の間で、2～3割程度(大阪高校生および兵庫西播磨若年

層) から 5 割ほど (大阪・神戸および京都市) にまで増加した、とも読みとれなくはない。
次に、関西以外の実態をみる。

尾崎 (1995) の 1990 年調査によれば、東京の女子中学生 (1171 名) の 19.9% および女子高校生 (1060 名) の 13.4%、男子中学生 (1285 名) の 1.9% と男子高校生 (1157 名) の 2.0% が、親しい同性の友人に対する時の自称詞として、下の名前を用いている。

荻野 (2007) は、首都圏の大学生 398 名 (男女は約半数ずつ) を対象とした調査結果であるが、家族相手に話す時の自称詞として、「愛称」を使用する者が女子学生の 16% ほど、男子学生の 2% ほどいたようである²⁰。

小嶋 (2013) では、愛知県内の女子大学生を対象に、2001 年は 247 名、2011 年は 169 名に調査している。その結果、親に対して使う自称詞として、「名前・愛称」の使用が、2001 年から 2011 年にかけて 29.2% から 34.9% へ増加したと報告している。

高橋 (2009) は、2004 年に沖縄県の中高校生に調査した結果を報告しているが、女子中学生 (計 946 名) の 88.4%、女子高校生 (計 819 名) の 85.5% が、同性の同級生に対して「自分の名前」を自称詞として用いると回答したという。

以上の結果をみると、「下の名前」を自称詞として使う現象は、首都圏では 20% 弱、中部地方では約 3 割あり、それぞれ 10 年以上の間、若年層女性の中に生じているのである。また、沖縄では中学生・高校生とも、8 割以上に使用がみられた。

以上、関西、および関西以外の地域における諸調査の結果を見てきた。現代日本では、若い女性において「下の名前」を自称詞として使う現象が、例外的とは言えない多さで確実に起きており、特に関西では、ここ数年で急速に増えたという可能性もありそうである。

この自称詞としての「下の名前」使用が増加している要因はなんであろうか。従来、これは「子供っぽい表現」(尾崎 1995)、「baby talk 的な表現」(大西 1992)、等と評価されている。しかし、ほんとうにそうなのだろうか。

自称詞としての「下の名前」使用の位置づけについて、次に、(イ) (ロ) (ハ) の 3 通りの考え方を提示する。

(イ) 緒方 (2015) がいう「上位者への起点推移」。

「上位者に起点推移することで、依存関係を確認し、いわば甘えた関係を確認している」という見方である。親から呼ばれる呼称であるところの自分の「下の名前」を自称詞として使うということは、親という他者を起点として呼称を定めることになる。親への「共感によって起点となる自我が主観的に推移」する。「親への共感」を甘えととらえるのである。

(ロ) 井上 (2009) のいう「聞き手との呼称共有」²¹。

これは、相手を上位者として扱っているわけではない。相手が既に自分を呼んでいる呼び名 (あるいは今後相手から呼ばれたい呼び名)、であるところの自分の「下の名前」を自

称詞とする。つまり聞き手と既に共有している（あるいは今後共有するはずである）という前提で「下の名前」という呼称を用いるということである。これは相手への「共感」や相手への「歩み寄り」という捉え方もできなくはないが、むしろ相手への「共感」のスタイルをとりつつ自己を中心とした世界へ相手を引き込む「促し」をおこなっている、という捉え方が可能である²²。

(ハ) 小林 (1997) の「より絶対的な個を表すものになっていく可能性」を示すもの²³。

人称代名詞や親族名称に比べると、「下の名前」は「絶対的な個」に近づくものである。自称詞において、一人称代名詞は、「第三者ではなく、話し相手でもなく、話し手である」ことから自己を指し示すものであるし、親族名称は、「相手との関係（相手から見た関係も含む）における自分の位置づけ」から自己を指し示すものである。しかし「下の名前」は、そのような、他との関係で相対的に自己を位置づけるものではなく、この世界においてハナコあるいはタロウという名前を持った人間、として絶対的に自己を位置づけるものである²⁴。「下の名前」は個人の特定性が高く、「これが自分なのだ」と主張しうるものである。

人が「下の名前」を自称詞として使い始めるのは、幼児期に、親から呼ばれた呼び名である自分の下の名前（もしくは下の名前の略称や愛称）をそのままおうむ返しに自称詞として用いるところから始まるのであろう。つまり使い始めだけ見れば、(イ)のように位置づけるのが適切であるし、幼児期、あるいはせいぜい小学校時代くらいでこの現象が終わっていけば、(イ)が正しいと思われる。しかし実態としては、中学生、高校生、そして近年では大学生やそれ以上の年代²⁵にも稀でなく見られるようなのである。その割合の多さや特異性のなさを見ると、「近頃の大学生はこどもっぽい」という解釈は必ずしも通用しないと思われる。したがって、(ロ) および(ハ)の解釈が成り立ちうると思われるのである。

そこで、仮説的ではあるが、次のような考えを提示する。自称詞としての「下の名前」使用が、女性に多いのは、女性が男性よりも「子供っぽく」「甘えている」からではなく、「絶対的な個」の表現に関してより貪欲だから、というふうにとらえることが可能なのではないか。「疎」の相手に対しては現れず、友人やあるいは家族に対して多く現れるのは、「絶対的な個」の表現を、「疎」の関係の人の前では行いにくいからではないか。そして、若い層は中高年層に比べて、「絶対的な個」を大事なものとしてふるまっているのではないか。

6 おわりに

関西方言における自称詞と対称詞について、人称代名詞を中心として全体的傾向をみたあと、個々の事象を検討した。

自称詞ウチについては、明治以降に生じた比較的新しい形であり、関西において、20世紀半ばには伸びていく勢いがあったが、20世紀後半から21世紀にかけては、一定の勢力を保ちつつも、女性全体をおおうほどではないことを確認し、その理由について、「個性の

強さ」をもつ語形であるために全体への普及が抑制される、という見方を提示した。

自称詞としての「下の名前」使用については、全国的にも増加している中で、関西の若年層女性の間で近年急速に増えつつある可能性があることと、その位置づけについて、「絶対的個」の重視とその表現である可能性を指摘した。

本稿における考察の源泉は、参考文献と小調査の結果、および内省である。今後、会話録音なども含めた、じゅうぶんな現地調査によって裏付ける必要がある。

注

¹ 本稿では、大阪・京都を中心とする関西中央部で地元のことばとして使われ、通用している言葉を「関西方言」と呼ぶことにする。

² このほかに、伝統的な自称詞として、楳垣 (1946) があげているコチャがある。コチ (こちら) に助詞の「は」がついて融合し、コチャになったもので、「コチャ知らんがな」「コチャかまわん」のように「コチャ・ン」の形で「私は～しない」という意味の定型句として使われる。牧村史陽 (1984) 『大阪ことば事典』の「おんごく」(昔の船場付近のこども遊戯) の項目で紹介されるわらべうたの歌詞のなかにも「コチャ」が現れている。

³ 表1および表2は、参考文献および大学生への小調査と、内省をもとに作成している。

⁴ ワテを女性語とする文献もあるが、ここでは山本 (1962) に従って男女共用としておく。

⁵ ただしこの調査の話者は、調査時に東京・大阪に在住していた人々であり、東京・大阪で言語形成期を過ごしていない話者も含まれている。

⁶ 中年層男性の職人などがアタシやアッシを用いたり、若年層女性が冗談でワシを用いたりするケースもないわけではない。

⁷ ソッチという語も対称詞的に使われているようであるが、対称詞とってよいかどうかやや疑問もあるため、表2には含めなかった。

⁸ 「アンタハン」「アンサン」については、現在あまり広く使われていない語形であると思われる。待遇価のラベル付けをするためには、複数の資料をもとに検討することが必要であり、今回、未検討のため、表には入れないことにした。

⁹ オノレの音声変化形と思われるオンドレもあるが、通常対称詞として用いられるというよりは、卑罵表現として使われるものであろう。

¹⁰ 女性も、ごく親しい相手に、その場の勢いが許す範囲で、オマエを使うことはありうる。

¹¹ アナタ (アにアクセント核がある発音) という表現が聞かれるのは、たとえば、小・中学校のやや年配の女性教師が生徒に対して説教する場合などである。

¹² 以下の引用にあたっては、漢字の字体および仮名遣いを現在のものに直した。

¹³ 「あなたは御自分のことをいうとき (=一人称)、ふつう何といいますか」という問への答えである。

¹⁴ 国立国語研究所 (1981) の調査結果の一覧表において、男女別や出身地別の数字はあるが、それらをクロスさせた使用の内訳はない。すなわち、「大阪出身」の「女性」の「ウチ使用者」の数は、実は不明なのである。しかしウチの使用者は44名中43名が女性であり、男性話者は1名だけであるため、ここでは仮に、44名全てを女性であると見なして割合を出し、論を進めた (ウチを使用している男性話者1名の年代も出身地も特定できない)。

¹⁵ 「現在自分が使用している自称詞をすべてあげ」させた結果である。

- 16 たとえば、大阪や京都で、職場における真剣な議論の場の発言などで、アタシという自称詞の使用はあり得ても、ウチという自称詞の使用にはかなり違和感が生じそうである。
- 17 「アタシ」も「ワタシ」にくらべれば女性性が強いようには思われる。中村（2007）は「アタシ」について、より強く女性的セクシュアリティを表現するものであるとしている。しかし「アタシ」は、女性性の強くない中立的なワタシ（改まった場面においては男女共用である）と聴覚印象が似ており、音声言語においては、中性性・中立性がある程度保てると考えられる。また、山西・山田（2008）はさまざまな使用者におけるアタシについて考察したうえで、自称詞アタシを、「飾らない自分らしさの表現」「男性に媚びるような女らしさはないが、女性的な感性を否定していない、という絶妙なバランス」などに結びつけて論じており、「アタシ」が女性性を特に強く示すものとはしていない。
- 18 調査を行った大学は平均的な大学、調査対象となった大学生は平均的な大学生、と見なしてよいと思われた。特に幼児性や女性性が強いといった特徴があるとは思われなかった。
- 19 2名とも中学生。
- 20 「下の名前」という選択肢はなかったようだが「愛称」がそれに当たると解釈できよう。
- 21 井上（2009）は、この「聞き手との呼称共有」という術語を用いているが、自称詞における敬称・愛称の使用に関して用いており、自称詞としての「下の名前」使用について、この術語を使っているわけではない。
- 22 この（ロ）の考え方は、鈴木（1982）が親族名称を自称詞として用いる場合について説明している中の、「この心理的同一化、心理的共感こそ、私の考えでは baby talk を支えているしくみなのであって」という記述と類似しているが、鈴木は名前を自称詞として使う場合について述べた訳ではない。また、鈴木は「促し」というところまでは述べていない。
- 23 小林（1997）は、自称詞・対称詞の使い分けの幅が狭くなったこと、使われる自称詞・対称詞が少なくなっていくと予測されること、などから「自称・対称代名詞は待遇意識を表すものから、より絶対的な個を表すものになっていく可能性がある」と述べている。そして 20 代の女性については、ワタシとアタシの使い分けが待遇の度合いとは必ずしも連動せず、ある程度自由に使い分けられている実態があり、「絶対的な個を表す」自称代名詞へと一歩踏み出しているともいえそうだとしている。小林（1997）の用いた資料は、職場の会話録音であるためか、自分の名前を自称詞として使った例は皆無とのことである。
- 24 木川（2011）は「自分」という自称詞について、話し手と話し相手の関係による制約がなく、親密性や改まりなどを示さず、中立的に一人称であることを示すことのできる「中立性」をもつものであると述べている。そして、「名字」で自分をさす用法とも共通する、という。木川（2011）は自称詞としての「下の名前」使用についてはふれていないが、人称代名詞や親族名称との違いにおいては「下の名前」使用も共通する点があると考えられる。しかし「下の名前」使用は、ほかの自称詞と比べて、個人の特定性が特に高いこと、さらに、それを発することに喜びや愛着といった感情が伴いやすいと考えられることから、「中立性」ではなく「絶対的個」という解釈を行うのが適当と考えた。
- 25 4章でも見たように、西川（2003）によれば、京都市左京区の保育園の園児の母親 111 名のうち 9 名が、「愛称・名前」を配偶者と話すときの自称詞として使うと回答した。年齢不明だが、保育園児の母親であることから少なくとも 20 代後半以上が大半と思われる。

参考文献

井上優（2009）「話し手自身に対する敬称・愛称の使用について」『日中言語研究と日本語』

- 教育』2 好文出版
- 榎垣実 (1946) 『京言葉』 高桐書院
- 大西智之 (1992) 「日本語の自称詞と人称代名詞-鈴木説再考-」『帝塚山大学教養学部紀要』
30
- 緒方隆文 (2015) 「呼称のカテゴリー分析-自称詞・対称詞・他称詞-」『筑紫女学園大学・
筑紫女学園大学短期大学部紀要』 10
- 荻野綱男 (2007) 「最近の東京近辺の学生の自称詞の傾向」『計量国語学』 25-8
- 奥村三雄 (1962) 「京都府方言」『近畿方言の総合的研究』 三省堂
- 尾崎喜光 (1995) 「若者の敬語-学校生活における自称詞・対称詞の使用状況-」『青少年問
題』 42-11
- 木川行央 (2011) 「一人称代名詞としての「自分」」『言語科学研究 神田外語大学大学院
紀要』 17
- 郡史郎 (1997) 「俚言-大阪市特有のことばとその使用実態-」『大阪府のことば』 明治書院
- 国立国語研究所 (1981) 『大都市の言語生活』 三省堂
- 国立国語研究所 (2002) 『学校の中の敬語 1-アンケート調査編-』 三省堂
- 国立国語研究所 (2003) 『学校の中の敬語 2-面接調査編-』 三省堂
- 小嶋玲子 (2013) 「女子学生における自称詞の使用 (2) -2001年と2011年の話し相手別自
称語の使用-」『日本教育心理学会総会発表論文集』 55
- 小林美恵子 (1997) 「自称・対称は中性化するか?」『女性のことば・職場編』 ひつじ書房
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店
- 鈴木孝夫 (1982) 「自称詞と対称詞の比較」『日英語比較講座 5 文化と社会』 大修館書店
- 高橋美奈子 (2009) 「地域語からみた自称詞における性差再考」『ことば』 30
- 中村桃子 (2007) 『〈性〉と日本語-ことばがつくる女と男-』 日本放送出版協会
- 西川由紀子 (2003) 「子どもの自称詞の使い分け-『オレ』という自称詞に着目して-」『発
達心理学研究』 14-1
- 西川由紀子 (2011) 「女子学生の自称詞の使い分け-わたし・うち・名前-」『研究紀要 京
都華頂大学』 56
- 廣崎千晃 (2003) 「自称詞の場面差による使い分け-アンケート調査より-」 2002 年度姫路
獨協大学外国語学部日本語学科卒業論文
- 前田勇 (1949) 『大阪弁の研究』 朝日新聞社
- 牧村史陽 (1984) 『大阪ことば事典』 講談社
- 山西正子・山田繭子 (2008) 『「あたし」考』『目白大学 人文学研究』 4
- 山本俊治 (1962) 「大阪府方言」『近畿方言の総合的研究』 三省堂

【編集後記】

『現象と秩序』第3号をお届けします。今回も、どうぞご堪能下さい。

なお、本号に掲載された2つの論考（石川論文とメイナード講演＝南保輔訳＝）に関連して、ヘリテッジ&メイナード編『診療場面のコミュニケーション』（勁草書房）が、9月末に刊行されています。あわせてお読み頂ければ幸いです。

次号は、2016年3月発行となります。慶應義塾大学の池谷のぞみ氏の神戸での講演記録（樫田の作業遅延により、掲載号が1号先送りになりました）のほか、日本社会学会大会のテーマセッション『専門職教育の社会学』（2015年9月20日午前開催。於早稲田大学）の記録も掲載の予定です。どうぞ続けてよろしくお願ひします。

付記：『現象と秩序』は、国立国会図書館雑誌記事索引の対象誌に選定されました。CiNii等でも「論文単位」「論文著者単位」で検索が可能となっております。（Y.K.）

『現象と秩序』編集委員会（2015年度）

編集委員

樫田美雄（神戸市看護大学）

中塚朋子（就実大学）

堀田裕子（愛知学泉大学）

編集幹事

松下晶季（神戸市外国語大学）

坂根杏奈（神戸市外国語大学）

編集協力

村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第3号

2015年 10月30日発行

発行所 〒651-2103

神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 樫田研究室 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074（ダイヤルイン）

e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>